

はじめての恋ではないけれど

Nana & Keisuke

伊東悠香

Yuka Ito

Eternity



エタニティ文庫

目次

はじめての恋ではないけれど	5
愛の軌跡	227
Je te veux	269

はじめての恋ではないけれど

1 平凡な日常の変化

結婚式ってどんなだろう。

綺麗なドレスを着て、めいっばい可愛くお化粧をして。皆に祝福されながら、隣には大好きな夫になるべき人がいる。

(ああ……なんて幸せな図なの！)

こんなことを夢見る私は、ごく平凡なOL、相澤奈々、まもなく二十五歳。

特に難しいことを望んでいるわけじゃなくって、本当に普通の……平凡な結婚をして、幸せな家庭が築けたらいいなあって思って日々を過ごしている。

自分が大切だと思う人や物を大切にしたい……私の願いは、そんな小さなものだ。

まあ要するに、私という人間は「平凡」の域を出ないということ。でも、その平凡さが何より心地いいと思うし、私はその世界の中でずっと生きていけるものだと思っていた。

今日は仕事が休みなので、彼氏の涼りょうと買い物に来ている。誕生日プレゼントを買ってくれるというので、嬉々として彼の隣に並ぶ私。

「気の利いたものが買えない」と悩んでいる涼に、「指輪が欲しい」とお願いした。

「指輪？ いけれど、俺の給料の範囲内にしてくれよ」

私は「当たり前でしょ！」と言って彼の手をギュッと握った。

「別に高いものが欲しいんじゃないの。なんていうか……たまには女の子らしいものが欲しいなって思ってる」

「何それ。奈々は十分女の子らしいじゃん」

お世辞じゃなく、涼は真面目な顔でそんなことを言う。

「ありがとう。そんなふうに言ってくれるの、涼だけだよ」

愛しさを込めて、彼の肩に寄りかかり、幸せをかみしめた。

そう。私の日常は決して派手ではないけれど、毎日が幸せで満ち溢あふれていた。大好きな涼がいて、仕事があって、こうやってたまにお互いの記念日を祝ったりして……他に望むものなんか何もなかった。

「あー、この指輪可愛いなあ！」

アクセサリショップで、小さなアクアマリンがちりばめられた指輪に目を奪われた。アクアマリンは三月生まれの私の誕生石でもあるし、この透明な海の色が大好き。

「え、こんな安いのでもいいの？ ダイヤとかさ、そういうの選んでもいいんだぜ？」
涼は拍子抜けしたような声を出す。私がつと高価なものを選ぶと思いついていたようだ。

「ダイヤも綺麗だけど、私は自分の誕生石がいいなって思ってるの」
私のためにダイヤまで考えてくれたのは嬉しかったけど、婚約指輪でもないのにそんな高価なものをねだる気持ちにはなれない。

「奈々がいいなら俺は全然いいけど」

涼はそう言って店員さん呼び、私の気に入った指輪をお願いしてくれた。

「誕生日のお祝いか何かですか？」

清潔感のある礼儀正しい女性店員がにこやかに私を見る。

「ええ」

「まあ、素敵。お似合いのお二人だわねって、店員同士で話してましたの」

私たちは言葉もなく照れるばかり。

「お客様の指に合わせますので、少しお時間をいただきますが、よろしいですか？」

「はい」

そつと手を出し、右手の薬指のサイズを測ってもらった。

(次に測ってもらうときは、左手の薬指になつてるといいな)

そんなことを思いつつ、隣に立つ涼をチラッと見た。

鈍感だけど優しくておおらか、見た目は結構イケメンだから、会社でもわりと人気がある。

私は特別面食いなわけじゃないのだけど、たまたま好きになった涼は素敵な容姿をしているから、いつかライバルが出現するかもしれないと覚悟している。

「はあく、指輪ができるのが楽しみだなあ。涼、本当にありがとう」

「奈々が欲のない彼女でこっちは助かるよ。でも、あの指輪、確かに奈々にぴったりだったな」

「でしょ？」

「うん」

店を出て歩きながら、私たちはこんな会話を交わしていた。

なんとも言えない幸せな空気が私たちを包む。

「奈々、手出して」

涼がそう言って自分の右手を出した。私は不思議に思いながらも左手を出す。

すると、涼は温かい手でそつと私の手を握り、そのまま自分のコートのポケットにズボット入れた。

「こうするとあつたかいだろ？ 奈々の手つて、いつも冷たいからさ」

「……」

私は照れ屋で、なかなか自分から手をつなごうとか言えない。だから涼はこうやって二人の距離を縮めるために、積極的に動いてくれる。

涼の手が冷えた私の手をじんわり温めてくれた。

「涼……好きだよ」

顔を赤くして、私はそうつぶやいたのだけど、その声は涼に届かなかったみたいだ。

こんな感じで……私の恋は順調そのもので、何の不安も焦りも感じてはいなかった。

そんな日常にちよつとした変化が訪れたのは、指輪を買ってもらったデートの日から一週間後くらいの頃だった。

休日は彼氏と楽しく過ごす私も、平日はせつせと仕事をしている。

今日は上司の樋口ひぐちさんから頼まれた業務が山積み。やってもやっても終わりの見通しが立たない作業に少しげんなりしていた。

（あゝお腹すいた）

私の心の声を通じたのか……お腹がぐぐと鳴る前に、昼休みを知らせるチャイムが鳴った。そして社内一斉に、電気という電気が消される。仕事を続けたくても、パソコンも閉じなければいけないのだから、皆諦めたように席を立つ。

「奈々！ お昼行こうよ」

元気な声がフロアに響いた。

隣の部で働く田島未来たじまみこが足取りも軽く私のほうへ寄ってくる。彼女は独特の色気とサバサバした性格が売りで、社内でも人気のある女性だ。実は私もちよつと憧れていたりする。同い年だけれど、未来のほうが大人びた雰囲気を持っていて、たいてい彼女のほうが年上に見られる。

「待ってね、今お財布出すから」

私はそう言って、シンプルなキナリの布バッグからノーブランドのお財布を取り出した。涼はお財布も一緒に買ってあげようかと言ったけど、今ので十分満足してるからって断った。

私はもともとブランド物とかにも興味がなくて、自分のスタイルとペースで生きる、のんびりした性格。長く伸びた髪を軽く横に結んでシユシユを日替わりにするくらいしかお洒落しやれはしない。

地味というほどでもないけれど、未来のように目立つ美人でもない……それが、私。「働いてるんだから、もうちよつと贅沢してもいいんじゃない？」

母親からもそう言われるけど、私はこういう自分に不満を持ったことは一度もなくて、それなりに楽しく幸せに生きている。

「早く行かないと定食売り切れちゃうよ。麺類は並ぶから嫌なんだよねー」
食堂へ向かう途中、未来はそう言って溜め息をついた。

この会社は、敷地内にたくさんの工場があつて、そこで働く全員が二つしかない食堂に集まる。だから当然のように毎日十五分くらい並ばされちゃうのだ。

「売店でパンを買ってもいいけど、今日はもう少しこつてりしたものが食べたいな」

私はとんカツ定食を食べたいと思っていた。朝何も食べなかつたから、すごくお腹が空いてる。

「やだ、太るわよ」

美容に気を配っている未来が眉をひそめるけれど、私はおかまいなし。

食べたいものを我慢してまで痩せたくない。そりゃあ……太りすぎは困るけど、私は普通の体形。特にダイエットの必要もない……と思つている。

「ま、佐々木くんはそんな奈々を好きだつて言つてるんだから、いいか」

唐突に未来は、涼のことを口にした。涼は私と同じ部署にいるので、グループは違うけれど、毎日顔を合せている。

佐々木涼、二十七歳……私にはもったいないくらい、素敵な彼氏。未来は、涼が浮気しないか時々チェックするよう私にアドバイスしてくれる。

「気をつけなよ……男なんて、いつフラツといくかわからないんだから」

「ええー……そんなことないでしょう」

このときの私は、涼が別の誰かに心を動かすなんて想像もできなかった。

付き合つて一年。結婚の二文字が話題にのぼることも多くなつた私たち。私としては「安定した」付き合いをしていると思つている。

私以上にマイペースで異性のことに疎い涼が誰かにフラリ……なんて考えるだけで笑つてしまふそうになるんだけど……

「男性つてそんな簡単に浮気しちゃうものなの？」

あまり何度も言われると多少不安になる。そんな私の反応を見て、未来は慌てて否定した。

「冗談、冗談。佐々木くん超真面目だもんね、大丈夫だよ。第一さ……女性にモテてる自覚がなくて、いつつもボーっとしてるから、いいキャラクターだよ。一緒にいて楽でしょう」

フォローの意味もあるのだろう、未来は涼のキャラクターを褒めてくる。

「ま、まあ。そうかな？」

そう言われてみると確かに、涼の隣にいるのは楽ちん。特別何かを話さないといけないうという空気もないし。部屋で一緒にDVDを観てたりすると、涼が居眠りをしてたりすることもあるから、多分彼も私と一緒にいるのが楽だと思つてくれてるんだろう。

「あの人、仕事以外ではそんなに熱心な趣味持ってないから。ていうか、仕事に追われて他のこと何もできないって言ってた」

「ああ、そういう感じだね。不器用そうだし」

未来がそう言っても特別嫌味な感じはしない。それどころか私は逆に、涼の不器用さを指摘されて吹き出してしまった。

そうだ、涼は不器用で嘘のつけないタイプだ。そういう真っ直ぐなところが彼の魅力で、だから私も彼を好きになった。

ただ、涼がどうして私を好きになったのか、そのあたりはいまひとつわからない。同期だけで開いた飲み会で話が合ったのがきっかけで、メール交換をするようになった。そこからは、特別お互い頑張らなくても自然に恋人の關係に移行していった。

「私、中の下くらの女だと思ってるんだけど、涼は私でいいの？」

付き合い始めた頃、そう聞いたことがあった。涼が私を好きだというのが、なんだか信じられなかったから。

すると、涼は彼らしい口調で言った。

「奈々は中の上だ。そんなに悪くないよ」

「俺にとっては上だよ」なんて言わないで、あえて「中の上だよ」と言う。一瞬力が抜けるけれど、それも涼らしさだと思えば笑って許せる範圍だ。

「評価してくれてありがとう」

私はそのとき、確かそんなふうにして笑顔を見せた。

未来は「奈々のその素直さと心のゆとりが最大の魅力よ」と言ってくれるけど、涼も同じように思ってくれているかはわからない。私自身でさえも、自分がどういう人間で、どんな魅力を秘めているのか……考えたことはあまりなかった。

昼休みが終わってすぐ、中途入社の子が紹介された。数日前から聞いていた、私の後輩となる子だ。年齢は二十歳。

「江藤マユリです。アルバイト以外で仕事をするのは初めてなので、ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが……どうぞよろしく願います」

ペコリと頭を下げる仕草がなんとも可愛らしい。顔立ちが幼くて、少し危なっかしいというか、頼りない雰囲気を感じてた。

「守ってあげたい」とか「力になりたい」と思わせる可愛さを持った子だな、と思った。くつきりとした大きな瞳と、それをさらに強調するような長い睫毛。その睫毛効果で彼女の魅力は倍増している感じ。おまけに、少し内股になった脚が、彼女をより幼く、可愛らしく見せていた。

「相澤さんが話しやすいだろう。いろいろ教えてやってくれ」

上司の樋口さんが私に向かってそう言った。

この樋口恵介けいすけという上司は、いつもムスツとしていて、どうも対応しづらい。

「はい。江藤さん、相澤です……どうぞよろしく」

すぐに返事をしないと「応答が遅い！」と注意されるから、私はかしこまった状態ですぐに挨拶をした。

「よろしくお願いします！ 良かった、優しそうな方が先輩で」

そう言ってマユリはニコリと笑った。

（お人形さんみたい。可愛いなあ）

私はこの五つ年下のマユリに好感を持った。なんといっても、可愛いのだ。

「なんでも聞いてね。遠慮しなくていいから」

「はい。わからないことだらけなので、よろしくお願いします」

感じのいい口調、首を少しかしげる女の子らしい仕草。私は「素直そうだし……うまくやっけていけそう」と思い、まるで妹ができたような気がして嬉しかった。

この女性がいずれ私の心に暗い影を落とすなど、このときは全く予想できなかった。

実際、私はマユリとうまくやっていた。

女が多くなると、とかくトラブルが起こりがちなんだけど、私とマユリはキャラクター

の違いが明らかだったせいか、お互いの足りない部分を補い合っていた。

少なくとも私はそう思っていて、マユリが困っていると喜んで手助けしていた。

「相澤先輩がいないと私、何もできないですよ……先輩、パソコンに詳しくて凄いですね！」

「江藤さんだって覚えが早いし、すごく丁寧に仕事するから安心」

私もマユリを褒める。とはいってもマユリの仕事が完璧なわけではなく、多少ミスのある書類は先輩として私がフォローしていた。

仕事はそれほど難しくもない。でも、マユリはどこかしらうっかりミスをしていたりする。（まあ、あとでまとめて注意すればいいか）

そう思って、私は彼女のフォローを続けていた。

そんなある日の昼食時、未来が意外なことを告げてきた。

未来は隣の部署で事務をしていて、私と仕事で直接関わることはない。だからマユリと接する機会だってそれほど多いはずがないのに、未来はマユリと少し接しただけで違和感を覚えたという。

「あの子、ちょっと調子いいよね」

「調子がいい？」

驚く私に、マユリのちよつとした「癖」みたいなものを語り始めた。

「だってさー……私のウエスト見て『モデルみたい！ 細いですよね』とか言うんだよ。私……正直胸は自慢だけど、ウエストはそれほど細くないのよ。軽くコンプレックスなのに……あんなふうに言われると逆に傷つくっていうか」

めずらしく未来が自分の体型を卑下するようなことを言った。

未来はかなりパーフェクトボディで……言われなければウエストにコンプレックスがあるなんて全くわからない。

「いいじゃない、実際モデルみたいに綺麗なんだしさ」

フォローを入れたけれど、未来はそれでも渋い顔をしている。

「うーん……奈々がそう言うってくれると素直に嬉しいけど。江藤さんに言われると、あまり嬉しくない。あの子のほうが細いから私が勝手に落ち込んでるだけなのかもしれないけど」

そう言ったきり、未来は黙り込んだ。切り替えが早いタイプだから、次に会うときにはまた元気な彼女に戻っているだろうけど……私は未来が感じた、なんとなく傷つく、というのがよくわからない。

確かにマユリは細くて小さくて、本当に誰が見ても「か弱そうだな」「守ってやらなければ」と思ってしまうような寡圍気の子で……同性の私ですらマユリのことを心配し

て、いつも気にかけてしまう。

そんな私は、マユリが持つ本当の……「恐るべき引力」には、気付かなかった。

マユリが会社に入って三か月が過ぎた。

彼女もかなり仕事をこなせるようになってきて、私が口出ししなくても、自らできる仕事を探したりしていた。それでもまだ小さなミスはあるから、それは私がフォローをした。ミスを注意して、マユリとの関係が壊れるのが少し怖かったのもある。

そんなとき、たまたま私が忙しすぎて手が回らなかつた仕事を、涼とマユリが二人で進めることになった。

(ああ……涼と一緒に仕事するチャンスだったのに。もう！ 樋口さんが私一人じゃ到底まかないきれない仕事を次々まわしてくるせいで!!)

疲れもあつて、私の怒りの矛先は樋口さんに向いた。

樋口さんは口数こそ少ないけれど、仕事には相当手厳しい。相手は女でも若くても、妥協や甘えを許さない。

「泣くのは家に帰ってからにしろ。今は勤務中だ」

涙をにじませてでも全く動揺の色を見せずに、訂正の指示がギッシリ書き込まれた書類を机にドサツと置いていってしまふ。

そういう人だ。

三十歳、独身。外見は若く見えるけど、何せ仕事に厳しいこともあって……誰も樋口さんに砕けた調子で接することができない。

そんな怖い人に向かつて、私は初めて仕事量について文句を言った。

「一人でこの量をこなすのは無理ですよ」

「……君の能力を買って頼んでるんだが」

樋口さんは涼しい顔をして言った。

「私、そんなに優秀な社員じゃありません」

そう言うと、彼は何故かフツと笑った。

「何がおかしいんですか！」

「上司に向かつて、仕事ができません……なんて言う社員がいるとは思わなかった」

馬鹿にされたような気がして、私は口をつぐんだ。

「まあ、相澤さんを頼りにしてるのは確かなんだ。俺も手伝えることは手伝うから、そ

こは遠慮なく言ってくればいい」

「……はい」

こんなわけで、私の仕事量は以前と変わらず。涼と一緒に仕事をするチャンスを奪われ……若干悲しくなったけど、こればかりはしょうがない。

そんな感じで仕事を頑張っていたけれど、そのうちマユリが時々、涼について愚痴をこぼすようになった。

「はあ……あの仕事けっこう大変」

化粧室でメイク直しをしていたマユリが、軽く溜め息をついた。

「量が多くて大変なの？」

そう尋ねると、マユリは首を横に振った。

「ううん。なんか……佐々木さんって全然話さないから。正直、やりにくい」

うちの会社は社内恋愛禁止を掲げている。だから、私と涼が付き合っていると知っている人もごくわずかで……当然マユリはまだ私たちの関係を知らない。だから、マユリがいくら涼の悪口を言っても、私はマユリサイドに立ってコメントをしなくてはならない。

「ごめんね、私も手伝えたらいいんだけど……今、樋口さんから頼まれた仕事が忙しくて」

涼の不器用さや、気が利くとは言えないところを知っている私としては、マユリが仕事のことと涼に質問したくてもできないんじゃないかなって心配になった。

でも、マユリはすぐに、いつものニッコリスマイルに戻る。

「大丈夫、わからないところは頑張って佐々木さんに聞かし……奈々ちゃんは今の仕事を頑張って」

つやつやの唇を軽くティッシュで押さえながら、マユリはそう言った。「先輩」と呼ぶのは堅苦しいからと、マユリは私を「奈々ちゃん」と呼ぶようになっていた。親しく接してもらえるのが嬉しくて、私もマユリのことを「マユちゃん」と呼ぶようになった。「そう……?」

「うん、ありがとう。奈々ちゃんがいるから頑張れるよ」

「マユちゃん、つらいことがあったらなんでも言ってみてね。可能な限り力になるから」

「うん。奈々ちゃんがいるから、職場は好きだよ。でもさ……まあ、また今度話すね」

なんとなくモジモジした様子で、マユリが俯いた。その瞬間、私の胸がズキリと痛んだ。

マユリが顔を曇らせると、私の心も軽く痛むのだ。何故かはわからないけれど、マユリのは体を張ってでも守ってあげたいと思ってしまう……私の中のこの感情は何なんだろうと自分でも不思議だった。

変な言い方になるけど、今の私はマユリに「惚れている」状態に近い。

マユリが笑っていればそれだけで嬉しいし、「奈々ちゃん！」と言って頼ってくれると、なんでも言うことを聞いてあげたくなる。だから、時々頼まれる面倒くさい仕事も喜んで手伝うし、お茶の時間に雑談するのを何よりも楽しみにしていた。

そんなマユリに魅力を感じている人間は少なくないと、私はだんだん知ることになる。

2 マユリの本性

マユリが本気で悩んでいるのを知ったのは、数日後のことだ。

「男性が多い職場って大変だな。居づらい感じ」

給湯室での雑談中、いきなりそんなことを言うから、私はビックリして何があったのかと聞いた。

ちよつと言いよどんでいたマユリだったが、重ねて尋ねると、ようやく口を開く。

「んー……なんか……私の誕生日とくに過ぎてるんだけど、秋沢さんあきさわからヴェイトンのバッグをプレゼントされちゃって」

「秋沢さん?」

秋沢さんは私のいるグループとは少し違う仕事をしている隣のグループリーダー。樋口さんとは逆のタイプで、誰に対してもフレンドリーでマイルドな男性だ。

仕事は相当できるみたいだけど、とにかく女性に甘い。私も時々「脚が綺麗だね」とかセクハラめいたことを言われるけど、それ以上の接近はないからうまくやり過ごしている。

でも、マユリは歓迎会のときに秋沢さんに送ってもらったのがきっかけで、相当しつこくブッシュユされているみたいだった。

「並んで歩いてたら、いきなり手とかつながらちゃって……正直引いたっていうか……」

「秋沢さん、奥さんも子供もいるよ？」

私はかなり驚いた。

いくら女性に甘い秋沢さんでも、そんな危険な行動をとるなんて。セクハラに厳しい世の中だし、会社に知られたらリーダーのポジションだって危ないくらいなのに。

「だよね……だから私、『こんなことされても嬉しくありません』ってちゃんと断ったんだよ」

「それなのに、しつこくしてくるの？」

「ん……なんか、私の部屋に少し寄らせてとか言われた」

それを聞いて、私は秋沢さんに相当な怒りを覚えた。秋沢さんに、マユリはあなたの誘いを嫌がってるんだから、潔く身を引いて！とやってやりたかった。マユリが可哀想でたまらない。

「まさか部屋に上げたりしなかったでしょ？」

「うん。ハッキリ『嫌です』って断った」

それを聞いて、一応ホッとする。

でも……それで、どうしてバッグをプレゼントされたりするんだろう。ピシヤリと拒絶したなら、いくら女性好きな秋沢さんでも強引にブランドのバッグなんてプレゼントするはずがない。

それについて、マユリは何気なく言い訳をした。

「私がヴィトンのお財布を持つてるのを知られて……それで、バッグもヴィトンが欲しいなあって、なんとなく雑談のときに言ったのを覚えてたらしいんだ」

「……」

私は、なんといいか一瞬わからなかった。

秋沢さんは女好きだという噂だけど、それでもヴィトンのバッグっていうのは……相当値が張るものだ。

そんな高価なものを受け取ってしまったら、それなりの要求はしてくるかもしれない。

「ねえ、そのバッグ返したほうがいいよ」

私はマユリの身に危険がおよぶ気がして、真剣にそう言った。それはマユリも感じているらしく……「やっぱ、返したほうがいいよね」とつぶやいた。

と、そのとき。涼が不意に給湯室を覗き、私に声をかけた。

「奈々、樋口さんが呼んでたぞ」

ドアの向こうからは私が一人で食器洗いをしているように見えたらしく、涼は私を「奈々」と名前で呼んだ。

「あ、本当？ わかった……すぐ行く」

そう答えた私の横にマユリがいるのに気づいて、涼の顔が一瞬こわばった。今の会話で、私たちの関係がバレってしまったからだ。

「え、ちよつと……奈々ちゃん。佐々木さんと付き合ってるの？」

マユリとは相当プライベートの話ししてきたけれど、涼のことはずっと隠していた。だから、思いがけずマユリに知られてしまい、ちよつと恥ずかしくなる。

でも……でも、マユリになら言ってもいいかな、と思い、打ち明けた。

「うん、社内恋愛禁止だから……極秘なだけだね」

「へー……そうなんだ」

いつものマユリの調子を考えると、少しは茶化してくるかなって思ったのに、彼女は逆に、そのままだんまりになってしまった。私はちよつと意外な気がした。

マユリが苦手だという涼と私が付き合っていることが困惑の原因なのか。それとも、たまたま気分が乗らなかつただけなのか。

マユリが黙り込んだ理由が、私にはよくわからなかつた。

マユリに悩みを打ち明けられた数日後、私はどうしても気になって、聞いてみた。

「ねえ……例の秋沢さんからもらったバッグ、返せた？」

給湯室で二人きりのときだったから、人に聞かれる心配はない。カチャカチャと音をたてて食器を洗いながら、マユリは困ったような照れたような……微妙な顔をした。

「困った……。『返します』って言ったたら、『一度プレゼントしたものは返されても受け取れない。いらなければゴミに出してくれていいから』って言われちゃった」

「えー……？」

それは確かに困るよね……と、私は思った。

値の張る新品のブランドバッグを捨てるというのは、多分相当な罪悪感を伴うはずだ。「それ、結局どうしたの？」

「捨てるのは無理だから、そのまま自分の部屋に置いてある。でも……あれ、彼氏が見たら追及されるかも」

「え、彼氏？」

このとき、私はマユリに彼氏がいることを初めて知った。

それまでは自分の恋愛について多くを語ろうとしなかつたマユリだけれど、これを境に、付き合っている彼氏のことについても詳しく話してくれるようになった。

マユリの付き合っている相手は、美容師。客として通っているうちに、彼のほうからオフに会えないかと誘ってきて、それ以来付き合うようになったとか……

「彼氏、束縛が激しいから時々窮屈なんだよね」

マユリがそうぼやくのを聞いて、私はちよつと驚いた。こんな魅力的な女の子を独り占めできる男がいるなんて、と。

マユリならまだまだ別の男性を選べる可能性を感じたから。

「でも、話を聞いてると、すごく優しいみたいだね」

「まあ……ね」

マユリの彼氏……「ダイちゃん」は、聞けば聞くほどマユリに入れ込んでいるようだ。男性にそこまで尽くされるといふのはどういう気分なのか、私には想像もできなかった。どちらかというところ、私は相手に「何かしてあげたい」と思うタイプ。そして私が付き合ったことのある男性は、たいてい、「何かしてほしい」と思うタイプ。だから余計にマユリの彼氏が特殊に思えた。

ダイちゃんは毎朝モーニングコールをくれるが、寝起きが悪いマユリは、電話を三回ぐらいもらわないと起きられないらしい。

ダイちゃんって相当マメだな……と驚いたのだけど、それどころかさらに驚く話もあった。

デートの最中、彼女が「アパートにマスカラを忘れた」と騒いだら、彼はマユリをその場に待たせ、ダツシユでアパートまで走ってくれたと言う。

「マユリはマスカラ命だからな」
そう言っただけは、マユリ愛用のウォータープルーフマスカラを手渡してくれたのだ。うだ。

実際、マユリはまだ二十歳という若さなお化粧にかなりこだわりを持っていて、スッピンでは決して外出しないらしい。
「メイクは女の身だしなみだってママに言われているの。だから、朝ご飯を食べないことはあっても、メイクなしで出かけたことは一度もないよ」

と「女の極意」を語ったこともある。
ナチュラルに見せつつも、かなり入念にポイントをおさえたメイクは、彼女をこれ以上ないほど輝かせている。

若いものだから、スッピンでも綺麗なはずなのに、彼女は頑かたなまでにメイクにこだわっていた。
この頃になって、私はマユリ独特の雰囲気によく気付いてきた。それは異性同性に関係なく、「我がままだけど、なぜか許せてしまう」と思わせる雰囲気。マユリは、

自分が声をかければ大抵の人が、イエスと頷くことを本能で知っているようだった。

それが……マユリの「恐るべき引力」だった。

樋口さんからの仕事は相変わらず容赦なくて、ここ一か月ぐらいはなかなか涼とデートできなかった。携帯で話すこともあまりないから、最近の涼の様子はマユリのほうが詳しいくらいだ。

ようやく今度の土日なら会えると涼からメールが届いて、心が躍った。

(久しぶりのデート！ 何を着ていこうかな？ あ、天気がよかったら外でお弁当を食べてもいいかも)

そう思って、久しぶりに手料理をふるまうことにした。涼は私の作った卵焼きが大好きで、今日も思わず卵六個を使って大量に作ってしまった。

『今日、めちゃくちゃ天気がいいよ。外で会おうか？』

出かける支度をしていると、涼からそんなメールが来た。外の清々すがすがしい空気に触れたい、緑の下でくつろぎたいと、涼も同じ発想をしたみたいだ。

でもまさか手作りのお弁当が用意されているとは思わなかっただろうけど。

『場所？』

『井の頭公園とか……どう？』

そこは涼と私が初めてデートした思い出の場所。

私は即答でOKした。

休日の井の頭公園は当然といえば当然ながら、かなり混雑していた。都心のオアシスとも呼ばれるこの緑あふれる公園。どれだけ混雑していても、訪れている人々は皆にこやかだ。

あちらこちらで大道芸人の人たちがパフォーマンスをしている。自作のイラストを売る人、小物を並べてバザーを開いている人もいた。それらを楽しく眺めながら、私は露店で可愛いストラップを涼とお揃いで買ったたりした。

「やっぱこの公園は人気だよね」

「うん。だけどお弁当食べられる場所……ないなあ」

並んで歩きながら、なんとか座れる場所を探す。

結局、ベンチと言えなくもない木の根の盛り上がっているところに腰かけて、やや苦しい体勢でお弁当を食べることになった。それでも私たちは一緒にいられるのが嬉しくて笑いが絶えない。

「美味しい！ 奈々って本当に料理うまいよなあ」

「そうかな」

真顔で褒められてしまい、私は照れる。涼はストリートな男性だから、褒め言葉にも

嘘がない。

おにぎりを食べながら、改めて涼の横顔を見つめる。

未来も言っていたけれど、やっぱり涼は「カッコイイ男」の部類に入るんだろう。スツと通った鼻筋に優しそうな奥二重の目。嫌味のない口元も好印象だ。何より、性格が温厚で一緒にいると癒される感じがする。

職場では仕事に没頭しているから、無口な怖い人に見られることもあるようだ。少し親しくなれば涼が温和な人間だとわかるのに、もったいないなあと思う。

「あ、奈々。約束してたあれ……できてたよ」

涼は思い出したようにそう言って、ポケットから小さな箱を取り出した。ちゃんと包装されていて、可愛らしくリボンまでついている。

「なに、なに？」

私は箱の中身がわかっているながら、涼の口から言わせようとせつついた。

「サイズ調整待ちしてた指輪だよ」

涼は素直にそう答え、私の手にボンと箱をのせてくれた。

「ありがとう！ すごく嬉しい」

「奈々が喜んでくれたら、俺も嬉しいよ」

「うん！」

幸せな気分で箱を開けてみると、キラリと光るシルバリングが顔を出した。あの日見たアクアマリンが、私に「こんにちは」と話しかけているように見える。

デザインがシンプルで毎日つけていても飽きがないだろう、そう思ったから、これを選んだ。改めて指にはめてみると、思った以上に素敵だ。

「わあ〜素敵！」

なんだか、愛の証^をもらった気がして、舞い上がってしまった。

「シンプルなのに近くで見るとけっこう存在感があって、いい感じだよな」

私の喜ぶ姿を見て、涼も笑顔になる。

「うんうん。ありがとう。涼の誕生日には何をお返ししようかなあ」

「ぷっ！ プレゼントをもらったとたんにお返しのことを考えるなんて、奈々らしいよな」

「そう？」

「うん。そういうところが好きなんだけどね」

涼がストリートに「好き」って言ってくれるのはめずらしいから、私はちょっと恥づかしくなって話を逸らした。

「そういえば……マユちゃんとの仕事はどう？ 終わりそうなの？」

普段はデートのときに仕事の話なんかしないようにしているのだけど、マユリが涼と

の仕事を手をなく苦痛そうにしているのが気になっていた。

「マユちゃんって、江藤さんのこと?」

「そう」

マユリと私が仲良しなのは涼も知っているので、マユリのことか話題に上っても特に不自然な空気にはならない。

「まあ順調だよ。あの子、雑談しながらも仕事はちゃんとやるから……問題ないよ」

涼の答えを聞いて、あれ?と思う。つい昨日もマユリは「佐々木さんとうまくいかない」と、つぶやいていたのに。

「雑談って何話すの?」

もしかして話題がマユリにとって苦痛だったんだろうか? けれど、涼にとっては特に気にかけるほどのことでもなかったのか、会話の内容は覚えてないと言われた。

私の心の中に黒いものがポツリと落ちた。

マユリのは好きだ。

可愛いし、私を頼ってくれている。自分の彼女についても隠さず話してくれるし、会社での悩みも相談してくれる。

でも、涼と雑談をしているなんて、一度も話してなかった。

質問すらしづらいという感じで、とにかく苦手なのだと言わされている。だから、私は

涼とマユリは相性が悪いのだろうと思っていた。でも涼の話を聞くと、特別関係は悪くなさそう……というより、どちらかというと上手くいっているみたいだ。

マユリを悪く思いたくはない。多分、たまたま涼の話をマユリがしなかっただけのこと。そう、ただそれだけのことだと思いたい。

でも……この心についた黒いシミの消し方を、私はまだ知らなかった。

少しモヤモヤした気分のまま月曜日を迎えた。

自分の中に納得のいかない何かがあることを、結局、涼には言えなかった。マユリの悪口みたくなってしまいそうだし、空気が悪くなってしまいうのも嫌だったから。

ただ、マユリと会話した内容をちゃんと覚えてほしい……というようなことは少し話した。

『奈々ちゃん……ちよつといい?』

データ打ち込みの作業中、マユリから社内メールが入った。

『どうしたの?』

『相談したいことがあるの。休憩室、誰もいないから……そこで少しいいかな』

なんだか、かなり深刻らしい。昼休みに話そう、とも言えず、了承の返事をした。

休憩室でお茶を買って向かい合う私たち。

マユリの顔は曇りぎみで、いつもの元気な笑顔がない。

「何……どうしたの？」

多分男性絡みだろうな……と私は直感していた。マユリの相談事は、八割が異性問題だ。今度は誰だろう、なんて思ってしまう。

「広報の梶山さんって知ってる？ 背の高いちょっとカッコイイ人」

やはり男性のことらしい。

「梶山さん？ 知らないなあ……」

私は本当に社内の人間に無関心で、情報のほとんどを未来から得ている。広報には時々荷物を受け取りに顔を出すけど、人の名前は全然覚えていない。

「髪がちょっと茶色で、独特の声でしゃべる人なんだけど……わからないかな？」

「……ああ、あの愛想のいい人？」

言われてみると、その人物には心当たりがあった。

いつもテンションが高めで、秋沢さんほどではないにしても、女好きっぽい感じの男性だ。

私が梶山さんを思い出したので、マユリは嬉しそうな笑顔になる。

「そう、その人。で……なんかね、広報の飲み会に無理やり出席させられて、彼にメアド教えちゃったんだよ」

「またか！」と思ったけれど、私は辛抱強くマユリの話聞いた。

「超強引でさー、しょうがないから教えたんだけど。でも、それから毎日みたいにメールがきて、めんどくさいんだ」

「あ、そうなんだ」

あまりにも「いつものパターン」だったから、私はそれ以上何も言えなくなる。マユリの話がこれだけなら良かったのだけど、最近一緒に飲まないかという誘いが入って、困っていると聞いて私も少し考えてしまった。

「もちろん断り続けたほうがいいと思うよ……だって、ダイちゃんに悪いでしょ？」

ダイちゃんという彼氏がいるのに、どうしてこんなに男性に対してガードが甘い……と説教したくなるのをグッとこらえる。

「だよー。でも、ちょっとカッコイイから一回飲むくらいならいいかなあつて思う部分もあるんだよね」

「ええ!？」

マユリの悩みは、私の予想とズレていた。

言い寄られて困っているのは事実だけれど、それほど嫌な気分でもない……というのが本音みたいだ。

「奥さんとうまくいってなくて、苦しいとか聞くと……なんか話聞いてあげたくなるし」

そう言うマユリに私は、「絶対二人きりで会っては駄目！」と釘を刺した。梶山さんが結婚しているというのは初めて聞く話だけれど、「妻とうまくいっていない」と口にするのは、浮気男のお約束みたいなものなのだ。

間違ひなくマユリは浮気の標的にされている。それがわかったからこそ会うのを強く反対したのだけど、マユリは微妙な顔をして、「だねー……なんとかうまく断ってみる」と、どこかそっけない言葉を残して休憩室を出ていった。

彼女は私に別の反応を期待していたようだ。

「モテるね」とか「マユちゃん、人気あるもんね」なんて言ってほしかったんだろうか。どうでもいい人間が相手だったら、そんなふうに気軽に茶化したかもしれない。でも私は本気でマユリを心配したからこそ梶山さんとの付き合いを止めた。

私は何故マユリのこととなると、こうムキになってしまうのか。どうして彼女の悩みに対してイライラしてしまうのか。

マユリが笑顔でいてくれないと不安になるというのは、ちよつと普通じゃない気がする。「おはよ、奈々ちゃん」と、内股で立つ人形のようなマユリを見るとホツとするのだ。悩み事なんかじゃなく、ダイちゃんとのノロケ話を聞かされるときが一番落ち着くのだ。マユリの全てを知っているのは彼氏のダイちゃんのだろうけれど、会社では一番自分が頼られていると思うと……不必要なほどのおせっかい魂が騒ぐ。

誰だって好きな人の役に立てれば嬉しいだろう。でも私は純粋にマユリのためになることを喜んでいただけじゃない。よくよく心の中を覗いてみると、マユリに優しくしている自分に満足している偽善的な私がいるのだ。今まで気付かなかった自分の嫌な部分を見つけた気がして、軽く落ち込む。

他人との距離をうまくはかれないタイプなのは、自分でもよく承知している。仲良くなると、男女問わず相手と深く関わろうとする。そして、相手にとつて無二の存在になろうとしてしまう。

こんなおせっかいな性格を決して長所だとは思っていない。だからこそ今まで会社の人間と極力関わらないようにしてきたのだ。心を許しているのは、未来だけだ。

でも……マユリは私の相当深い部分にまで入り込んでしまっていた。

マユリのことを好きだと思ってる。でも……時々その気持ち、たとえようのない虚しさに変化する。

3 樋口との接近

「相澤さん、今日残業できるか？」

パソコンで入力作業をしていると、樋口さんが声をかけてきた。

これは面倒なことを頼まれるぞ……と直感が働き、思わず身構える。

「まあ……少しでしたら」

「そう遠慮するな。すごく面倒だけど、どうしてもやってももらわないといけない仕事があつて……それを手伝ってほしいんだよ」

せっかく山積みだった仕事が片付いてきたというのに、またもや面倒な仕事が舞い込むらしい。げんなりしながら、新たな仕事の内容を聞いた。

場所を移して説明するという樋口さんに連れられて、古倉庫に行った。

そこにある資料全部をリストにして、データ登録するという仕事だった。ざっと見積もっても何千冊という膨大な資料……考えるだけで眩暈めまいがしそうだ。

「これを全部、やらないといけないんですか」

「そうだ、やらないといけない。俺も暇を見つけて手伝うし、とりあえず今日は仕事のやり方を覚えてもらいたいから……少し残ってくれないか」

こう言われたら逃げ道はない。

「わかりました」

そう言つて樋口さんの作業を見て手順を覚えようとしていた私に、声がかけられた。

「とりあえず資料が番号順になつてるか確認してくれるか？」

「わかりました」

確かめると、資料はちゃんと順番どおり綺麗に並んでいる。

管理が良かったようで、欠番もなく全部きちんと揃っていた。ただ、背表紙が英語だから、これを書き留めるのが大変そうだ。

そんなことを思った瞬間、体がブルブルと震えた。倉庫には暖房なんかないから、当然寒い。カーディガンでも着てくればよかつたかな、と思つていたら、

「寒いかな？」

カタカタ震えている私を見て、樋口さんがそう言った。

「ええ。日も暮れたし……もともとここってひと気がないせいかな、相当寒いですね」

やせ我慢もできないほど寒かったので正直に答える。そんな私を見て、めずらしく樋口さんが優しく笑った。この人が笑うところなんて、飲み会の席ですら見た記憶がない。

いつも自分の世界に入り込んでいる感じで、人に声をかけられてもなかなか反応を示さない。

「どこか……影カゲをひきずつているような男性。

私にとって、樋口さんは大人すぎるのかもしれない。親しみを込めてつきあおうという気持ちにはなれなかった。

「俺の仕事手伝つてるの、相澤さんだから……風邪で休まれると困るな」

そう言うって、樋口さんは自分の着ていたジャケットを私にフワリとかけてくれた。こんな紳士的な態度をとる彼を初めて見たから、ちょっと戸惑う。でも正直なところ、ジャケットは相当暖かくて……樋口さんの温もりにホッとした。

「私は暖かいですけど、樋口さんが風邪ひきますよ」
隣にいる彼を見上げる。

でも、シャツとネクタイだけの姿になった彼は、特に寒そうな様子も見せずに、埃をかぶった古い資料を数冊抜き取っていた。

「俺は丈夫だから、心配するな。それより……これ、早くデータにしないと。焼却処分されてしまうと、資料があつた痕跡すらなくなるからなあ」

「なんでそういう大事なことを今まで後回しにしてたんですか？」

私はジャケットをがっちり握って、樋口さんが持つ資料を覗き込んだ。腕と腕が触れ合うほど近くに寄ってしまい、思わずドキッとする。

「面倒だし、誰もやりたくないって言うから……のびのびになってた」

ということは、その面倒な仕事を私ならやると思つたつてことだろうか。いつもハイハイといい顔をして仕事を引き受けてきたけれど、便利扱いはされるのは困るなあ。

軽く落ち込んでいると、樋口さんは不思議そうに私を見下ろした。

普通に並んでいるのだけど、樋口さんは背が高すぎるから、私を見るときはこうして

も「見下ろす」かたちになる。

「君が嫌だつて言うなら無理強いはいしないが……」

いつもなら「文句言わずにやれよ」と来るはずなのに、今日はなんだか対応がマイルドだ。もしかしたら私がちよつと元気がないのに気付いているのかな。そのポーカーフエイスからは真意を測れなかつたけれど。

「いえ、頑張ります。ちようど仕事が落ち着いてきたところなので」

「そうか。ならお願いするよ」

その後、私はデータの入力方法を教わって、この日の残業を終えた。

樋口さんとあんなに近くで話したのは初めてだったけれど、案外優しい部分もある人なんだな……なんて思ったたりした。

日が経つにつれ、マユリは、私に悩み相談があると云っては男性絡みの自慢話をするようになっていった。

聞いているうちに、私はマユリに対して嫌悪に近い感情を抱くようになり……：自分の心が黒くなつていくのがどうにも悲しかった。

マユリは皆に評判がいいから、うっかり愚痴もこぼせない。マユリのことを相談できるのは未来だけだった。未来とは部署こそ違うけれど、昼休みは必ず一緒なので、マユ

りに関する悩みをポツリポツリと打ち明けていた。

「元氣ないじゃん。今日も何かあった？」

例の資料をリスト化する作業と他の仕事を抱えて余裕がなくなっていたし、あの倉庫に入って以来どうも体調が思わしくなかった。そのうえマユリのことでもイライラしていた私は、思わず大きな溜め息をついてしまう。

「ううん。なんか……仕事を抱えすぎちゃって……でも新しい仕事を頼まれても嫌って言えないんだよね」

と自己嫌悪に陥る私に、未来はフォローを入れてくれる。

「それが奈々らしさなんじゃない。人がいい証拠。でもさ、大変なら誰かに助けを求めればいいんだよ。そういう部分では江藤さんを見習ってもいいかもよ」

未来はそう冗談めかして言う。

「……ま、そうだよ。ダメだなー……年上なのに、私ってば彼女に負けてるよね」
「まあまあ。とにかく江藤さんとは距離を保ったほうがいいと思うけど」

未来は私に比べたらずっと「世間」を知っている。私なんかは表面的なものを見て、すぐに信じちゃうけど、未来は人間はそう簡単に信じてはいけない複雑な生き物であるということをよく知っていた。だから、最初からマユリに深く関わろうとせず、たまに会話をするときも絶妙な距離を置いている。

でも私は、明らかに距離の取り方を間違ってしまった。

友達として好意をもたれているわけでもないのに、友達取りでおせっかいを焼き、その上、マユリからなめられている。

機嫌のいい日にはマユリは相変わらず可愛らしく私に話しかけてくるけど、自分の気分が乗らないときや、私がマユリの意に沿わない返事をする、すぐに不機嫌になる。だからって無視するのも大人げないな……と思います、私はつとめていつもどおりの対応をしていた。

しかし心の底に芽生えた黒い感情が、マユリと話をするたびに大きく育っていくような気がした。この嫌な感情を早く払拭はらいつくしてしまいたくて、私は涼が忙しくしているとわかつていながら、今週中に会えないかとメールをした。

午後、資料を持って廊下を歩いていたら、未来が会議室に入っていくのが見えた。相変わらず美人で憧れてしまう。

未来の父親は画家で、娘に「大和なでしこ」になることを求めているという。だから未来はいつも身なりがきちんとしていて、姿勢もいい。そして彼女にぴったりのフローラル系の香水が傍に寄ってきた男性を瞬時に悩殺する。

なのに本人は「あー、男ってしつこいから、嫌い！」なんて言っているのだから面白い。そんな未来にも好きな男性のタイプみたいなの俗っぽい好みがあるのか興味を湧いて、

聞いたことがある。そうしたら、「奈々のとこの樋口さん？ あの人超タイプ」なんて言ったから、椅子から転がり落ちそうになった。

「あの人全然優しくないよ!？」

樋口さんと仕事で直接関わっている私にとっては、「たまには休んでくれないかな」
 と思ってしまいうぐらい煙たい存在。

でも未来に言わせると、彼は理想の男性だという。

「あのさー、奈々。人間の優しさって、目に見えないものだと思うけど……」

「目に見えない優しさ？ あの樋口さんにそういうのがある？」

私が目を丸くしていると、逆に未来に驚かれた。

「あんないい男に気付かないんだ！ 私に誘いをかけてこない男っていったら、彼ぐら
 いだよ？ それが魅力だっていうんじゃないけど、なんていうか……男らしいプライド
 持つてるよ、あの人」

未来の言葉には笑い飛ばせない雰囲気があって、私は息をのんで聞いていた。

「樋口さん……夜中まで頑張って、自分の仕事じゃないものまでこなしてるの知って
 る？」

「知らない。ていうか、なんで未来がそんなこと知ってるの？」

部署が違うのに仕事の内容を多少なりとも知っているのは、それだけ強い関心を持つ

ているということだろう。未来は本気で樋口さんを気に入っているのかな……と思った。
 「うちの上司が全然仕事をこなせなくて、樋口さんに協力してほしいとか頼んでるのを
 聞いてちゃったんだよね。樋口さん、その仕事引き受けてるんだよ。当然分野が違うから
 相当苦労してるはずなんだけど……」

初めて聞く話だった。

樋口さんが別の部署の仕事を引き受けてるなんて、うちのグループの人は、誰も知ら
 ないはずだ。

(……あの樋口さんがねえ)

未来との会話を思い出して、樋口さんの意外性について考えていると、涼から返信メー
 ルが届いた。

『金曜日の夜。仕事が終わったら奈々のアパートに行くよ』

断られるかとも思ったけど、案外スムーズにOKの返事をもらい、ホッとした。涼に
 癒いしてもらって、心の中の黒い感情を、消してしまいたい。

そうすれば、また優しい気持ちでマユリに接することができるとは。

だけど、ちょっと不安なのは、涼がマユリと親しくしていること。

でもそれは仕事なんだからって自分に言い聞かせる。

そう。

涼は浮気とかできるタイプじゃない。外見も素敵で、性格もいい。嘘もつかないし、誠実。あと一年ぐらい付き合えば、結婚の話をしたっておかしくないだろう。二人で一緒に暮らす日を空想しながらニヤニヤしてしまふこともしょっちゅうだ。

涼と会う約束をとりつけたあと、私は気の緩みが出たのか……資料室で作業をしているうちに、頭が痛くなってきてしまった。まずいかな、と思つて薬を飲んだけど、どんどんひどくなつていく。そうしているうちに、とうとう私は資料室の床に座り込んでしまった。

どうやら風邪をひいてしまったようだ。お昼に食べたものもちゃんと消化できていない感じで気持ち悪い。

「どうした？」

手伝いに来てくれたのだろう、樋口さんが私を見つめ、駆け寄ってくる。

「頭が……頭が痛くて。それに、お腹も気持ち悪くて」

相手が樋口さんだということも忘れ、私はそのままぐったりと壁によりかかった。

「風邪か？ 寒い資料室で仕事させたのは俺だから……」

そう言うと樋口さんは私の額に手を当て、熱の具合を見た。その直後、私は彼に抱き上げられた。

「え？」

さすがに驚いて、ボンヤリしていた頭が一瞬クリアになった。

だって、社内で上司にお姫様抱っこされるなんて、あり得ない！

「駄目ですよ！ 降ろしてください。こんなの誰かに見られたら……！」

「大丈夫だ。医務室まで裏道がある。そこを通れば誰にも見られずに済むだろう」

「……」

ちゃんと考えたうえでの行動なのだとわかって、私はホッと……一瞬忘れていた具合の悪さが戻ってきて、再びぐったりしてしまふ。

力の抜けた体がずり落ちないようにしっかりと支えてくれる樋口さん。

胸板の厚さがスツ越しにもわかる。たくましい男性の体。

(樋口さんに抱き上げられるなんて……嘘みたい)

「相澤さん」

「はい」

「今日の帰りは送るから。医務室で定時まで休んでろ」

(え？ 樋口さんが私を送ってくれる？)

びっくりして口をきけずにいる私にかまわず、彼は医務室のドアを開け、私を空いて

いるベッドに寝かせてくれた。
「風邪薬程度で治る熱じゃない気がする。保険証があるなら病院に寄ったほうがいいだろう」

「保険証……持っていないです」

ベッドに寝けていても体が痛い。ゾクゾクして寒気がとれない。もしかしたらインフルエンザかもしれない……

樋口さんも私の様子を見て同じように思ったようで、保険証はあとでいいからとかく病院へ寄ろうと言い残し……医務室の温度調整をして、出て行ってしまった。

シンとした医務室に一人残され、急に心細くなる。樋口さんがずっと一緒にいてくれたらよかったのにも思っただけだ。

(涼……具合悪いなんてメールしたら心配するよね)

一度携帯を開いたけれど、涼に余計な負担をかけたくなって、そのまま何もせずに閉じた。

その後、樋口さんは本当に定時ちよつと過ぎに私を迎えに来てくれた。

「歩くのもしんどいだろう？ 社用車を借りた。後部座席に乗るといい」

スポーツ飲料を手渡し、彼は私を支えるようにして社用車まで連れて行ってくれた。

「君のカバンはこれか？」

キナリのバッグ。間違いない私のだったから、コクリと頷いた。

「制服は着替えていられないだろうから、今日そのまま帰るんだな」

「……はい」

もう樋口さんの言いなりだ。

涼はこんなふうには状況判断が早くないし、私の世話を焼くというのもあまりない。だからか、樋口さんから受ける親切がなんだかとても新鮮だった。

言葉は荒くぶつきたらばうだけれど、一分の時間も無駄にできないほど忙しい彼が私のために時間を割いてくれている。未来が言っていた、樋口さんの中に潜む優しさが少しわかったような気がした。

案の定、病院でインフルエンザという診断を受けた。薬をもらってのむ。再び社用車に乗ると、私は後部座席に寝かされた。

「やっぱりインフルエンザだったな。しかし君も無茶をする……具合が悪いなら、そう言ってくれないとこっちはわからないからな」

樋口さんは自分のジャケットをフワリと私の体にかけてくれた。あの日……資料室でしてくれただけと同じように。

「すみません。ご迷惑おかけして」

「いや」

謝る私を制して、樋口さんは私の顔をじつと見た。

「謝るのは俺のほうだ。無理をさせすぎたな……悪かった」

「……」

樋口さんが私に「悪かった」なんて言う場面、想像したこともなかった。そのせいか、彼の低い落ち着いた声が、妙に私の心をざわつかせる。

（病気で心が弱くなっちゃってるのかな。なんだか樋口さんが頼もしく見えてしまう）

ボンヤリした頭でそんなことを考えつつ、私は自分のアパートまで彼に送ってもらったのだった。

4 不穏な空気

「ねえ……奈々、気を付けたほうがいいよ」

三日後、熱も下がり、お医者さんに出社許可をもらってようやく出勤した朝。未来が、私にこそっと耳打ちした。

「え、何を？」

「事情はわからないけど、この前、江藤さんが佐々木くんと一緒に歩いてるの見たんだよ」それを聞いて、私はかなり驚いた。

あのあと、私は涼にインフルエンザで会社を休むことをメールしたけど、涼は忙しいと言って、見舞いにも来てくれなかった。

忙しいのだからしょうがないと思っていたし、会う約束をしているのは明日の夜だったから……それまで我慢しようと思っていた。

なのに……マユリと二人で会っていたなんて、かなり衝撃的な話だ。

「単に偶然一緒になったんじゃないの？」

「だといんだけど、江藤さんが妙に楽しそうに彼に寄り添ってるように見えたからさ……他人事ながら嫌な気分になった。でも私の気のまわしすぎかも。変なこと言っごめんね」

それだけ言って、未来は去った。

「……」

しばし仕事の手を止めて、真面目にパソコンに向かってる涼の顔を見る。

いつもどおり真剣に仕事に取り組んでいて、時々隣にいるマユリに質問をされている。何が楽しいのかはわからないけど、一緒に書類を覗き込んで、二人で同時に笑顔になるのが見えた。

その瞬間だ。

私の中で、何か猛烈な負のエネルギーが湧き出した。

止めようとしても止まらない……たまらなく嫌な感情の噴出だった。

「相澤さん、おい……相澤さん！」

涼とマユリの様子に気をとられていて、気付かなかったのだろう。いつの間にか樋口さんが何度も私のことを呼んでいた。

「あ、はい。すみません」

「体調まだ悪いのか？ 顔色悪いぞ」

「いえ。大丈夫です……すみません」

樋口さんは私の様子を気にかけてくれて、本調子になるまでは、と仕事の量も減らしてくれた。

顔色が悪いのは樋口さんのせいじゃない。でも、その理由をここで言うわけにもいかない……

「キツかったら言えよ？」

「はい。ありがとうございます」

本当は樋口さんに改めてあの日のお礼を言いたかった。上司としての責任なんだろうけれど、私に優しく接してくれて、おかげで早い段階でインフルエンザを治すことがで

きた。

でも、今の私は心に余裕がなくて……

さつき噴出した黒い感情に、まだ支配されている。そのイライラが外に向かって出てしまっただけだった。

「……疲れてるみたいだから、今度食事でもご馳走してやるよ」

「え？」

樋口さんが冗談でもこんな誘いをかけるなんてあり得ない。

表情を見てみると、やっぱりいつもの真面目くさった仕事人間の顔だ。

「冗談……ですよね？」

「なんだよ、俺と一緒にだと食事がまずくなるとでも言うのか？」

明らかにご機嫌を損ねた様子。私は慌てて訂正した。

「違います、ええと……樋口さんがそういうことをおっしゃるとは思わなかったのです」

「俺だって鬼じゃないんだよ、たまには部下をねぎらおうって気持ちも持つてるつもりだ」

憤慨しつつも、私を食事に誘ったのは彼の本心らしい。

「樋口さんって絶対ケチだと思う！ 一度もご飯とかご馳走になったことがないもの」と常々ばやいていた自分を思い出し、恥ずかしくなった。